2021.3.1

現代俳句千葉

140号

巻頭エッセイ

俳句と私

幹事 越野雄治

俳句との付き合いはと遡ると茫洋としている。高校時代の国語の授業での芭蕉、蕪村の古典句や子規、虚子の近現代俳句を思い出すが、格別の印象もない。はっきりと記憶にあるのは、ずっと下って、昭和六十年に刊行され始めた朝日文庫の「現代俳句の世界」シリーズである。とっくに社会人となっていたが、書店の棚にあった同文庫の『西東三鬼集』のページを何気なく繰った。俳句でこんな事が言えるのかとこれまでとは違う印象をもった。

しかし俳句の門を叩いたのは更にずっと下って会社定年を迎えたころである。きっかけは、三鬼の記憶があったからかも知れない。何の伝もないので、ネットでＮＨＫ文化センター千葉教室を探し出し、当時「好日」の小出秋光主宰が講師をしていた俳句講座に入会した。ノート二冊ほどの講義の記録を見ると俳句の基本をそれなりに学んだようだ。程なく「好日」に入会し現在にいたるが、結社のスケジュールに我ながら真面目に対応してきたのが取り柄で、どれほど内容、表現が深化しているのかは心許ない。

しかし俳句という詩文芸を軸に古典、歴史、美術などの漠然とした知識が整理できるようになった気がする。それに付属して、お水取り、四万十川、奥出雲の里、佐渡の能、出羽三山等の探訪なども日常に彩りを与えてきた。草木の知識が増えたのも望外の余録である。

何故俳句をするのかと問われれば、好きだからと言うしかないが、好きの底を探ると、ある衝動があるような気がする。中西進氏の「散文は情報伝達が得意で『受け取る必要』を満たす言葉であり、詩は『蓄える必要』を満たす言葉。心を耕すのが詩の言葉である。」というのは至言と思う。散文に取り巻かれ、自ら作り、その中で疲れる日々はもう結構だというのが、私のように定年後に俳句を始めた人間の正直なところではないだろうか。

目　次

俳句と私	越野 雄治	1
令和三年度総会・俳句大会中止について		2～3
諸家近詠		4～7
会員・会友の近況		4～5・13
私の感銘句		8～10
研究句会のご案内		11
津田沼研究句会報告		11
青葉研究句会報告		11～12
柏研究句会報告		12～13
君津研究句会報告		13
ひろば 掲示板		14

千葉県現代俳句協会会報

令和三年度総会・俳句大会中止について

会長　並木邑人

新型コロナウイルスによる感染の状況は、昨年十一月から拡大のスピードを早め、再度の緊急事態宣言が発出された一月七日の直後にも、一日の感染者数が八千人に迫るなど緊迫の度合を深めてきました。千葉県においても、昨年末に累計感染者数が一万人を超えると、一ヶ月も経たない一月二十五日には二万人を超える急激な蔓延状況を示すに至りました。同時に重症者数、死者数も増大し、医療崩壊の瀬戸際に立たされています。

このような事態を考慮し、甚だ残念ではありますが、昨年の四十周年記念大会に引き続き、今年度の総会・俳句大会も中止せざるを得ないと判断いたしました。

会員・会友の皆様には一月末に葉書にてお知らせしたところですが、総会の議決についても、昨年同様役員の書面決議を以て総会の議決と見做すこととし、二月十八日までに全員の賛成を以て可決されたものと決定いたしました。素よりイレギュラーな手法ではありますが、会員の健康を確保しながら協会の存続を計る緊急措置として、ご理解をお願いいたします。

ステイホームを強いられた状況下で危惧されるのが、人と人、会員同士がぶつ切りにされ、共に俳句創作に打ち込んできた情熱までも挫かれてしまうことです。協会の四つの研究句会は、通信句会などに切替えて継続を図り、多数の会員に参加していただく吟行会は、開催時期を先延ばしして何とか実施しようと計画しています。

出口が見えてこない時こそ「遊びをせんとや生まれけむ」の精神を再び奮い立たせ、各種俳句大会への投句、通信句会への参加など、今できることに能動的にチャレンジし、共に危機を乗り越えようではありませんか。

〔第１号議案〕

令和２年度事業報告

１．行　事

⑴　定期総会・４０周年記念大会

①　令和２年度総会　３月１５日（日）千葉市文化センター
新型コロナ感染予防のため中止
（書面決議により可決）

②４０周年記念式典　同上　中　止

③ 同上　俳句大会　同上　中　止
（郵送にて事前投句の部表彰）

④ 同上　祝 賀 会　同上　中　止
三井ガーデンホテル千葉

⑤ 同上　合同句集　５月１７日（日）
『千葉県現代俳句集成２０２０』刊行

⑵　吟　行　会

春の吟行会　４月２８日（火）　中　止
吟行地：千葉市 稲毛海浜公園　会場：稲毛記念館

秋の吟行会　１０月２９日（木）　参加者　５３名
吟行地：千葉市 稲毛海浜公園　会場：稲毛記念館

⑶　研 究 句 会

①　津田沼研究句会　毎月第２火曜日 午後１時より
津田沼１丁目町会会館（２句事前投句）　８回（内、通信１回）実施

②　青葉研究句会　毎月第４木曜日　午後１時３０分より
千葉市民会館（３句事前投句）　１２回（内、通信６回）実施

③　柏研究句会　毎月第２土曜日　午後１時より
柏市・ハックルベリー書店２階（５句当日投句）　１０回（内、通信４回）実施

④　君津研究句会　毎月第１木曜日　午後１時３０分より
君津市生涯学習交流センター（３句事前投句）　６回（７月より）実施

２．幹事会等

定例幹事会

第１回	１月２１日（火）	船橋市勤労市民センター	
第２回	５月２６日（火）	同上	中　止
第３回	８月２５日（火）	同上	
第４回	１１月２４日（火）	同上	
臨時幹事会	６月２３日（火）	同上	

３．会報の発行

第１３６号　（３月１日刊）
第１３７号　（６月１日刊）
第１３８号　（９月１日刊）
第１３９号　（１２月１日刊）

４．会員数等（令和２年１２月３１日現在）

会員　３０２名　会友　２２名　計３２４名

【主な異動】

＊入　会　１８名

新会員（１５名）新江　堯子　加藤　春草　五味ちひろ　藤好　良
南川　好玄　宮野　遊子　坂本　節子　坂本　正夫
橋本志津子　青野　友香　正山　小種　加賀谷秀男
市岡　舜脩　亀山こうき　小林　ゆか

転入会員（１名）三浦　澄子

新会友　（２名）たけなか華那　松﨑あきら

＊退　会　３４名（会員　３０名　会友　４名）

内、物故者（会員３名）
関根　信三　北村　妍二　林　哲

〔第２号議案〕

令和２年度の会計報告

［令和２年1月1日～12月31日］

収 入 の 部

(単位：円、％)

費　目	予算額(a)	決算額(b)	対比(b)/(a)	摘　要
前年度繰越金	561,900	561,900	100％	
諸事業収入	1,055,000	753,000	71	俳句大会、吟行会
助成金収入	620,000	603,900	97	
会友費収入	48,000	46,000	96	
創立40周年特別事業収入	1,513,000	1,614,515	107	基金、句集刊行
雑収入	0	3,008	0	
合　計	3,797,900	3,582,323	94	

支 出 の 部

(単位：円、％)

費　目	予算額(a)	決算額(b)	対比(b)/(a)	摘　要
会議費	70,000	41,700	60％	幹事会 他
会報発行費	540,000	551,163	102	４回発行（送料共）
通信費	50,000	44,605	89	
行事費	828,000	429,018	52	俳句大会、吟行会
印刷費	250,000	147,337	59	チラシ、総会案内葉書 他
研究研修費	50,000	10,000	20	協会活動の活性化
消耗品費	40,000	79,464	200	
交通費	100,000	15,000	15	
交際費	50,000	0	0	
創立40周年特別事業費	937,000	868,816	93	記念式典費、句集刊行費
雑費	10,000	990	10	
予備費	872,900	0	0	
合　計	3,797,900	2,188,093	58	

次年度繰越金

(単位：円)

収入合計	3,582,323
支出合計	2,188,093
次年度繰越金	1,394,230

財 産 目 録

(単位：円)

千葉銀行稲毛東口支店	1,375,451	普通預金
現　金	18,779	
合　計	1,394,230	

〔第３号議案〕

監査報告書

　令和２年度の会計及び事業の執行状況について監査した結果、すべて証票書類と一致しており、正当に処理されていることを確認しました。

令和３年１月２６日

監査役　吉野　精

監査役　内田庵茂

〔第４号議案〕

令和３年度事業計画（案）

１．行　　事

⑴　定期総会・俳句大会

①　令和３年度総会　　３月21日㈰　千葉市文化センター

②　同上　俳句大会　　　同上　　　同上

⑵　吟　行　会

春の吟行会　　未定

秋の吟行会　　未定

⑶　研 究 句 会

①　津田沼研究句会　　毎月第２火曜日　午後１時より
津田沼１丁目町会会館（２句事前投句方式）

②　青葉研究句会　　毎月第４木曜日　午後１時30分より
千葉市民会館　　（３句事前投句方式）

③　柏研究句会　　毎月第２土曜日　午後１時より
柏市ハックルベリー書店（５句当日投句方式）

④　君津研究句会　　毎月第１木曜日　午後１時30分より
君津市生涯学習交流センター（３句事前投句方式）

２．幹 事 会

⑴　定例幹事会

第１回　　１月26日㈫　　船橋市勤労市民センター

第２回　　５月25日㈫　　同上

第３回　　８月24日㈫　　同上

第４回　　11月23日㈫　　同上

３．会報の発行

第140号　　（３月１日刊）

第141号　　（６月１日刊）

第142号　　（９月１日刊）

第143号　　（12月１日刊）

〔第５号議案〕

令和３年度の予算（案）

［令和３年1月1日～12月31日］

収 入 の 部

(単位：千円)

費　目	予算額	総会	俳句大会	吟行会	会報発行	協会運営	前年度予算額	前年度決算額
前年度繰越金	1,394	0	0	0	0	1,394	562	562
参加費収入	675	0	555	120	0	0	1,055	753
助成金収入	580	0	0	0	0	580	620	604
会友費収入	44	0	0	0	0	44	48	46
創立40周年特別事業収入	－	－	－	－	－	－	1,513	1,614
雑収入	0	0	0	0	0	0	0	3
合　計	2,693	0	555	120	0	2,018	3,798	3,582

支 出 の 部

(単位：千円)

費　目	予算額	総会	俳句大会	吟行会	会報発行	協会運営	前年度予算額	前年度決算額
会議費	189	85	9	35	15	45	70	42
通信費	218	70	52	16	40	40	50	45
印刷費	778	100	145	38	455	40	790	698
消耗品費	87	10	2	0	5	70	40	79
旅費	86	10	16	10	20	30	100	15
交際費	22	0	2	0	0	20	50	0
報償費	166	0	130	26	0	10	50	10
雑費	20	10	0	0	0	10	10	1
予備費	1,127	0	0	0	0	1,127	873	0
創立40周年特別事業費	－	－	－	－	－	－	937	869
行事費	－	－	－	－	－	－	828	429
合　計	2,693	285	356	125	535	1,392	3,798	2,188

備考：当年度より事業部別費目別予算に変更したため、前年度はあくまで参考値

諸家近詠

牛すじを煮込む師走のシチュー鍋　袴田　菊子
物差しに子の名うっすら十二月
小春日や双子の母と立ち話
浴室の鏡しっかり枯はちす
着脹れて羽生結弦に酔い痴れて

年新た水の流れは変らずに　浜名　儀一
生き死にのことは大地に返り花
探梅や樹間に洩れる陽の温み
手料理の妻の手ほどき冬夕焼
隠しごと一つ外套の裏ポッケ

揚羽一頭まつ白な雨あがり　高野　春子
ぬひぐるみに貰つてしまふ春の風邪
マスク縫ひをり深夜放送よりワルツ
足場から足場へ天のかたつむり
ふり向けばだあれもゐないチューリップ

身のうちの星座傾けメロン切る　清水　伶
鶏頭を素描にすれば荒野なり
ほろほろと人を忘るる草の絮
たてがみのそよぐ限りを冬銀河
頬杖をはずす眩しさ歯朶ひらく

水晶の真ん中に道冬の靄　鈴木　螢子
階段のいちばん下の春の月
水無月の鏡の中のモジリアニ
遠汽笛蜘蛛の囲いの下通る
善人と並んで座り捩り花

穭田の実のなき穂へと雀かな　菱木　良一
石蹴の石だけ残る夏の街
夜の雨明日にしずくの夏柳
下総に筑波ならいの吹き下ろし
冬座敷客帰りたり壺一つ

仄あまし筍の皮むきたる手　浪本　恵子
ご供養のお茶に一片氷点ず
主治医のペン借りてメモとる梅雨寒し
猫と児と座卓にもぐり昼寝中
冬星や昔の河岸の常夜燈

風の盆笠に隠して身を焦がす　冨田　茂
行き違い耳を澄ませば虫の声
忍び寄る老いに戦く小夜時雨
自由とは欲の追求神無月
悴む手煎茶一服膨よかに

たまさかの青空きっと小鳥来る　永妻　和子
パレットに洋梨の色搾り出す
習慣は生きるよすがや竹の春
突き当たるたびに道あり秋の声
冬林檎ビュッフェに小さい美術館

囀りの中に朝礼終りたる　清水　重陽
コンビニの内装終り春惜しむ
秋の夜の家貧しくも灯のともり
秋風や洗車の水の冷たさよ
御仏の面輪まぶしむ煤払い

《会員・会友の近況》①

・かれこれコロナ禍の一年。ひとはかたまってしまい、そこから徐々に体は動いてゆくのですが、余り動いてはいけないと言われ、呆然と立往生の日々です。新しい感動の出合いに飢えております。（鈴木　螢子）

・「コロナにてスティホームで雑句の山」と言うところです。（菱木　良一）

・昨年の秋から体調をくずし、ようやくまともに日々の生活が送れるようになりました。これからも俳句に向き合っていきたいと思っています。（冨田　茂）

・コロナ禍から学んだ苦難を身の廻りを見直し、体を労わることに努力しています。その源にあるのは、俳句の力、毎月の主宰ご指導の文音句会に支えられました。（永妻　和子）

・コロナウイルスなどに振り回された一年でしたが、畑作業のお陰で運動不足などせず過ごせたことは、大変ありがたく感謝しています。健康第一ですね！（戸邉　光一）

・ドバミンなる脳間物質の出が悪いことからここ二、三年体がスムーズに動かなかった。それが昨年浦安の順天堂大学病院脳神経内科の投薬治療を受けるようになり確実に好転してきたように思う昨今です。（檜垣　梧樓）

・いつの間にやら九十歳。巣ごもり生活ながら、新年を迎えこのように拙句も出させて頂き、誠にありがとうございます。コロナ禍もどこまで続くやら、一日一日を大事に過ごしたく願っております。（畠　淑子）

・新型コロナウイルスの中、協会の運営ほんとうにありがとうございます。（鈴木　一行）

諸家近詠

問わるれば椿は花の重さなど　直江　裕子
水仙の系図いちばん上は海
逃亡といえなくもなし春の泥
塗りのこした白いところが春愁
菜の花ぼっちここは朝から暮れている　田沼美智子
父の日や玄関までのマスクの子
夏の子の日がな一日プラモデル
ウイルスも地球生物日記買う
生きてこそコロナ禍に在り雑煮膳
ウイルスへデマへ強気の大マスク　長濵　聰子
のどけしや底曳網を屋根に干し
灯台も我も読点鳥わたる
青の残像翡翠は印象派
ひぐらしや残り時間が逃げていく
八十路にも花野ときどき隠し味　戸邉　光一
冬紅葉いつも殿り歩く癖
負け軍鶏の遠嶺見ており冬紅葉
絵筆一本転がっている冬の縁
年詰まる両手に提げしレジ袋
落武者の貌して喰らう茸飯　高木　一惠
早蕨や風の子としてわが余生
顔無しの息ひそめゆく春の闇
青簾はじめて夫の髪を切る
勉斗雲追うて月夜のテレワーク
風流のマスクいろいろ老の春　千葉　信子
蟻のかほ蟻は知らざりでんでら野
百日の家居ざくろの実は真つ赤
牛の仔のすでに牛なり立ち上がる
白粉花の風は耳掻くおとに似て
香水の一滴完全なんてない　髙橋　健文
日没の後の無音や裂膾
句を詠むは死者との対話小望月
混沌の世やいまさらの破蓮
ペン立てが鋏の居場所鳥渡る
生ひ立ちにいつも風吹く竜の玉　檜垣　梧樓
浅香光代逝くサッチーが待つてゐる
寒燈や飛天の舞を見せてくれ
厳寒の海に梵天立ち上がる
侘助やパーキンソンてふ病ひ
香港大変リンゴ日報ジミーライ　普川　洋
三が日まだひらがなのままである
煮凝った時間を風がきてほぐす
初春が膨らむ末広がりのノンセンス
銀杏降る9秒9はまた明日
雪女雪と女に分かれけり　中嶋　三雄
ガスタンクは地球のかたちラムネ飲む
加湿器の微音帰らぬ時間かな
名月や雑木林に鳥けもの
渇筆の長き縦棒十二月
初刷や天地を分けるごと開き

・子ども等や故郷から離れ住むようになり、雪の多い季節になると妙に子等の日常が気がかり。何の役にもたたないとは知りつつ電話やラインを入れて一寸うっとうしがられる齢になっております。（髙橋由紀子）
・小誌「半島」を休刊し、俳句作りと運動をし、葡萄を少々。皆様のご活躍を期待しております。（武田　和郎）
・その朝私は五・七・五の十七音を繰り返していました。千葉先生の九十歳のお祝いに贈る一句をと。師に出合い俳句に出合い今老年を豊かに過ごすことが出来ています。〈齢九十師は耿耿と冬の陽を〉　永井　奈々
・自粛生活を強いられ外出も出来ぬまま、いつの間にか九十歳。かつて経験した風景をひもとき作句を楽しんでおりますが、せめて憂さ晴らしに〈ペディキュアの素足ばら色老いてなほ〉老いてなお身ぎれいにして楽しんでおります。（中山　皓雪）
・移動自粛で俳句が作れると思っていたら、目隠しされたよう、難しいですね。（馬場　馬子）
・今年は近年になく厳しい寒さが続き北陸や北日本での雪害なども心配です。加えて新型コロナは収まる気配も見せず、ひたすら耐える日々。こうした中でも俳句が身近にあることで救われています。（多胡たかし）
・マスクに慣れ、誰もがマスクをしている風景が当り前の日常に。最近は向うから来る人の顔がマスクをしていてもわかるように。人と逢って笑顔で言葉を交わせるのが何となく嬉しい。一方気になるのは道端に使い捨てマスクが落ちていること。（中里　結）

諸家近詠

馬場　益江

白息が白息を抜き山下る
冬ばらの一花忌明けと知らされて
小柄なるヤクルトレディ梅雨を被て
すぐそこの空を知らない兜虫
唐突なさよなら汗のラケットよ

武田　伸一

言葉とはあやうい容器青梅落つ
すこしだけ蓬の匂いする母よ
雲の峰なんかイチローの背中
夭折に遅れ鉦叩きにつらなる
フリードリヒ・ニーチェを蹴りて水鳥よ

畠　淑子

撫牛に体温ありて春兆す
女正月ガラスの隅の拭き残り
妣とゐる雛のきおくは炎の記憶
豆撒いてコロナころころ消え失せろ
ピッコロの音のはづみて夏深む

鈴木　一行

夜には夜の青空のある桜かな
赤ちゃんはいつも眠たい金魚草
秋の波こんなに遠くまでとどく
風呂吹という円満なかたちかな
初富士を乗せて列島弓形に

髙橋由紀子

冬運河退屈今日も流れてる
雲引いて雪の立山海に浮く
エンディングノート書いたか書けたか十二月
初夏の風道連れに句を詠みぬ
テレワーク馴む子の背がごりと鳴る

鈴木まんぼう

進化論なんて嘯く海鼠かな
核兵器不使用宣言鵙高音
大西瓜どつこい熱く生きてゐる
中村哲のジャラーラーバードや水澄めり
冬ざるる自粛の町の陶狸

田端　重彦

秋さぶや入山禁止のエアーズロック
初富士や韋駄天気負ふ力水
春立つや栄えの命名「チバニアン」
半夏の夜火球音立て関八州に
霊山の巫女のかしづくご来迎

髙橋　宗史

平凡がいい日溜りのすみれ草
チューリップ生徒のいない小学校
万緑の候母よ元気にしています
論争のことば丁寧ぶどう粒
山眠る生存するは叔母ひとり

並木　邑人

素読する冬濤を噛むかぶと蟹
遠き日のわたしの分母狐に礼
飛雪それは室を飛び出す酵母菌
海鼠喰うなまくらな詩が着床す
水に書く文字積りゆくステイホーム

武田　和郎

ひよどりの死戦東北越えし数
墨客来花と芽の垣賞でながら
夢見ぐさ恋は伏せ字に寵りおり
さいかちの芽ぐむ短躯は結跏趺坐
微苦笑の謎は知られず年の暮

永井　奈々

水仙の一輪パンの耳剝がす
ふるさとの銀座かくまで冬ざるる
子爵男爵じゃがいものほくほく
信州姨捨雪なしと雪便り
追伸のながくなるくせあめんぼう

富澤さち子

息災をこぼさぬように梨を剥く
山鳩の三拍子から秋深む
冬菫いつもの場所が良いという
あらすじを妣に聞いてる里神楽
巣籠りの十指マニキュア冬ざるる

中村　博子

買初めは白一色の紫羅欄花
さらはれし貝は戻らず彼岸潮
サーファーの影裏返る釣ヶ崎
竹を伐る強き根張りのあの世まで
十二月八日母乳代はりに山羊の乳

徳田　悠子

薯蕷のうすら仕立に帰還する
山鳩の野を曳くように秋霖よ
肩並べ茸てらてら意志の森
素心臘梅崖の社のワキ方に
直球に嗄れ声あり新人王

中山　皓雪

黄砂降るコロナウイルス連れて降る
駆け廻る跣足みまもるテレワーク
コロナ禍は歴史の継目梨をむく
吾が影の一部が欠ける寒月光
雲にもの申して落下雲雀かな

諸家近詠

雪吊りと残映の家加賀の里
外つ国の戦火にも見ゆ冬茜
望郷や移動自粛の炬燵酒
見てください素顔の牡丹菰の中
二ん月や庭木の手入れ捲りみる

馬場　馬子

人影のかさなる動き遠焚火
雑木山冬夕焼のいろのなか
一寒星愛ず静かなる瞬きを
冬山へ祈りの鐘を鳴らしけり
風聴くや酒一合と湯豆腐と

多胡たかし

落ち合った眉毛一対冴返る
大空と大地の神話ふきのとう
青柚子や指紋薄れしこと篤と
椿の実月の満ち欠け零れおり
白っぽいキッチンよくぞ竈馬

杉山眞佐子

重さなきばかりに遠く山眠る
星もまた旅してゐたり大冬木
フロイデのひと声ふくら雀かな
寒に入るゆつくりとわが咀嚼音
親指をふふむ眠りや春隣

中里　結

草青むしずかな爆発の序曲
ヒヤシンス鬱のひとつが星になる
ふうせんかずら異端の風となら遊ぶ
皇帝ダリア風に野望を盗まれて
大マスクそよいでみたい耳がある

羽村美和子

寒稽古血の滲みたるトゥシューズ
阿蘇五岳まず中岳に初明り
草千里千里を奔る野焼きかな
小春日や微笑み浮かびたる児の寝顔
終い風呂柚子に面の皺伸ばす

高橋　節夫

初の日を拝む幸せ我卒寿
掃き清む巫女の袖にも淑気かな
寂として仁王参道苔の花
孤にあらず蝶の一日と暮らしけり
実らせず肥料とならむ麦を蒔く

高田　紫秋

父ぽつり「西日背にして敵機は来る」
梅雨晴の牛の背越や国後島
あの宿で浴衣の君と月見たつけ!?
バンクシー月をスマイルフェースにす
聖夜に上映『密着牧師24時』

鈴木　房州

雑炊を啜り終えたる別れかな
慇懃に友を連れ去る寒見舞
髭舐めて猫息災や福寿草
行く手には淡き灯火日記買う
老いらくのメール交信春を待つ

田中つとむ

霧の日に使うビジネスの合言葉
霜柱鋼の音と云いし人
鰯起し語る訛の老三人
駅見えて道近くなる黄落期
外は木枯勝力士の眼の赤し

中西布美子

年新た等身大で生きたしと
啓蟄や次々上がる熱気球
蝸牛入り組んでいる都内地図
花野にてリュックに齢しまいおり
煩脳も生きる術なり冬帽子

管ノ谷文子

実名を伏せて花野を通り抜け
雪うさぎ月への道も先ず一歩
風葬か樹木葬かと夜の新樹
花いつも向う岸より咲いてくる
ワイングラス満たして春の小休止

中村　冬美

嬰々の足入道雲を蹴っ飛ばす
青春の夢は未だに真夏の夜
幾度の峠未だある十二月
侘助に呟き残す一人旅
再びの生きる道あり春を待つ

田村　麗

遂に来た仕掛けた罠にあらい熊
蓮根のシャリと歯ざわりアルミ箔
蕭条と枯野を抱く水の神
ジャズの日の炊き立てご飯匂い立つ
冴え返る蠢く街のキャッシュレス

野口　京子

「え」のなかの駅伝走者五人抜き
新しい命にきかす霜柱
人の声裏戸表戸抜けて初夏
もてなしのただそれだけの団扇風
行き止まりに気付いた景色秋の影

樋口　博徳

私の感銘句

	作者名	号	頁
まんさくのぬくもりほどでよろしいの	直江　裕子	136	8
爪切つて爪をあつめて明易し	永井　奈々	136	9
百年や誰かのために小鳥来る	渡辺　澄	137	10
水門を開きし夜の金魚鉢	山﨑　政江	137	11
冬の月ひとつ臓器を奉る	横須賀洋子	138	4
春の別れ乳房のようなマスクたち	山中　葛子	138	4
蝌蚪の紐わたしはわたしとは言へず	片岡伊つ美	138	6
向日葵の不安な明日という方位	加倉井允子	138	6
整列を星に散らしてチューリップ	澤田　寿一	139	6
あの声は息子だったと羽抜鳥	下村　洋子	139	7
まんさくのぬくもりほどでよろしいの	直江　裕子		

「よろしいの」というフレーズが、疑問、断定、煩悶、疑念、挑発、詰問、諦念、悟り等々、さまざまな含意をブルドーザーのように読者に押し出してくる。男は、こうした女声に翻弄されて生きていくしかないのである。

久保　筑峯			
この星の裏側きっと星月夜	塩野谷　仁	139	5
三越でケーキを買った広島忌	小林　実	139	5
みな不安みなマスクして葡萄狩	尾形ゆきお	139	5
冬芽紅し核無き日本推す教皇	佐藤　浩子	139	5
入口は大きく開けて夏に入る	岡田芙美子	139	5
あめんぼは垂直思考かも知れぬ	神作　仁子	139	5
それぞれに葱立てているレジの列	小野　裕文	139	5
縄文の土偶に臍や秋深し	小多田文子	139	6
満月から使者納屋の臼には罅	島田　翠松	139	7
白つばき照る静けさの浄土かな	下村　洋子	139	7
冬芽紅し核無き日本推す教皇	佐藤　浩子		

二〇一九年十一月二十五日ローマ法王が来日した。原爆による破壊行為が二度と起こらないよう「すべての命を守るため」被爆地ヒロシマ・ナガサキを訪問した。

林　ゆみ			
何かもの言ひたげなままの手袋	直江　裕子	136	8
Xを求めよ窓に積もる雪	中里　結	136	11
春月に届くロープを買いに行く	野口　京子	137	8
吾輩は恋猫であるまだ八十	吉岡　一三	138	4
初蝶来はがきの麗の字がきれい	久野　康子	138	6
向日葵の芯の三密ゴッホ展	岡田　淑子	138	7
木槿白花しんぷるに母のこと	坂間　恒子	139	5
花野より戻るランプを置き忘れ	塩野谷　仁	139	5
枯菊を焚くやチェンバロ鳴るごとし	佐藤　映二	139	6
霧吸うたび古墳らしくなる古墳	木之下みゆき	139	7
泉　志眞子			
たぶん死は冬のさくらのやうにくる	直江　裕子	136	8
陽炎をすくってみたら父と母	馬渕　津枝	136	10
着ぶくれて夫の反骨薄れけり	森　孝子	137	10
晩節の薔薇はもちろん真っ赤です	山﨑　政江	137	11
おぼろ夜のあぶない記憶の中にいる	石井紀美子	138	4
縁側の昭和向きたる籐寝椅子	久保　筑峯	138	6
母はもう鶴折るばかり星月夜	加藤　法子	138	6
迷いつつ生きて桜の底力	岡田芙美子	139	5
蜻蛉消え青空のまた深くなる	塩野谷　仁	139	5
かぎりなくふかき日本語座禅草	重田　忠雄	139	6
田端　重彦			
どこまでも圏外表示枯野ゆく	藤井　遥	136	7
裸木となりて肝の坐りたる	実籾　繁	136	7
蒼天に逃げかくれなく大冬木	多胡たかし	136	9
自分史の舌出している曝書かな	徳吉洋二郎	136	10
薫風や柩に納めたるザイル	中村　博子	137	8
着ぶくれて夫の反骨薄れけり	森　孝子	137	10
終戦忌語りべとなる夫は遺児	山中　賴子	137	11
出歩かぬことが安全亀鳴けり	内田　庵茂	138	7
来し方に筋書は無し根深汁	小張　直子	139	6
百寿者を目指し今年の年酒酌む	佐久間眞城	139	6
百寿者を目指し今年の年酒酌む	佐久間眞城		
千葉　信子			
秋桜声変りして来る少年	戸邉　光一	136	7
大正の女将は聲で霧払う	並木　邑人	136	8
春泥や校門を出る靴のあと	宮下　奈緒	136	10
寒晴や屋根職人の横歩き	浪本　恵子	136	10
別々に長生きせむと夜着に入る	津高里永子	137	8
反対に回す地球儀原爆忌	東　國人	137	10
浅蜊貝水から水へひきこもり	山中　葛子	138	4
天皇の透明傘や夏燕	浦野　五郎	138	5
海見たくなりぬ林檎を真っ二つ	塩野谷　仁	139	5

冬芽紅し核無き日本推す教皇　佐藤　浩子

二〇一九年十一月二十五日ローマ法王が来日した。原爆による破壊行為が二度と起こらないよう「すべての命を守るため」被爆地ヒロシマ・ナガサキを訪問した。

林　ゆみ

何かもの言ひたげなままの手袋　直江　裕子
Xを求めよ窓に積もる雪　中里　結
春月に届くロープを買いに行く　野口　京子
吾輩は恋猫であるまだ八十　吉岡　一三
初蝶来はがきの麗の字がきれい　久野　康子
向日葵の芯の三密ゴッホ展　岡田　淑子
木槿白花しんぷるに母のこと　坂間　恒子
花野より戻るランプを置き忘れ　塩野谷　仁
枯菊を焚くやチェンバロ鳴るごとし　佐藤　映二
霧吸うたび古墳らしくなる古墳　木之下みゆき

泉　志眞子

たぶん死は冬のさくらのやうにくる　直江　裕子
陽炎をすくってみたら父と母　馬渕　津枝
着ぶくれて夫の反骨薄れけり　森　孝子
晩節の薔薇はもちろん真っ赤です　山﨑　政江
おぼろ夜のあぶない記憶の中にいる　石井紀美子
縁側の昭和向きたる籐寝椅子　久保　筑峯
母はもう鶴折るばかり星月夜　加藤　法子
迷いつつ生きて桜の底力　岡田芙美子
蜻蛉消え青空のまた深くなる　塩野谷　仁
かぎりなくふかき日本語座禅草　重田　忠雄

田端　重彦

どこまでも圏外表示枯野ゆく　藤井　遥

裸木となりて肝の坐りたる
蒼天に逃げかくれなく大冬木
自分史の舌出している曝書かな
薫風や柩に納めたるザイル
着ぶくれて夫の反骨薄れけり
終戦忌語りべとなる夫は遺児
出歩かぬことが安全亀鳴けり
来し方に筋書は無し根深汁
百寿者を目指し今年の年酒酌む
百寿者を目指し今年の年酒酌む

一三九号で作者は無為徒食の余生と自分で揶揄していたが、・・・連衆の一人から九十四歳の誕生祝に〈秋高し目指す百歳祝い酒〉の句が届いた。嬉しい。と近況を述べている。少子高齢化、人生百年の時代と言われているが社会保険料の増加が問題の日本。健康で元気が第一。我々の社会貢献はそれなりの納税と極力医者に掛らず、保険を使わぬように健康で体力の維持に努め、若い世代に負担を掛けないように心掛けるのが仕事であろう。

千葉　信子

秋桜声変りして来る少年
大正の女将は聲で霧払う
春泥や校門を出る靴のあと
寒晴や屋根職人の横歩き
別々に長生きせむと夜着に入る
反対に回す地球儀原爆忌
浅蜊貝水から水へひきこもり
天皇の透明傘や夏燕
海見たくなりぬ林檎を真っ二つ

被爆図のうらは真っ白真っ平　重田　忠雄　139 6

海見たくなりぬ林檎を真っ二つ　塩野谷　仁

ふと海を見たくなることがある。白鳥を見に行きたくなったりする。小説のような言葉で掲句は始まる。作者は「海程」の創刊からのメンバーだから金子兜太譲りの句が多い。だが若々しい。他にも「点字のように友消えてからたちの花」のように、荒々しさは無いものの心を鷲掴みにする感性は素晴らしい。俳句に説明は不要である。「林檎を真っ二つ」のなんとキャッチーなこと。

鈴木まんぼう

ふくろうの鳴くたび月が熟れてゆく　羽村美和子　136 8
梨齧る音に挟まる昭和かな　並木　邑人　136 8
陽炎をすくってみたら父と母　馬渕　津枝　136 10
咳嚔こんがらがって真言宗　徳吉洋二郎　136 10
柴犬は孫の弟日向ぼこ　前島きんや　137 8
投合の愛の研や山笑う　石井紀美子　138 4
はらはらと竹皮を脱ぐ自粛かな　山中　葛子　138 4
こんな日は徒然草と春を待つ　片岡伊つ美　138 6
蜻蛉消え青空のまた深くなる　塩野谷　仁　139 5
骨太を褒められ壷に入る晩秋　越野　雄治　139 7

池田　博臣

下総の雲が雲追ふ菜種梅雨　宮下　奈緒　136 10
有終の病葉紅葉鳥になる　増田　豊子　136 10
身中の螺子巻きにくる秋小鳥　中村　冬美　137 8
ただ一語しぐるる男こぼしけり　福原　郁　137 8
ＡＩが被曝する日のさるすべり　秋谷　菊野　137 9
思いだすたび新しい雪降れり　渡辺　澄　137 10
神かけて孤独死ではない梅一輪　横須賀洋子　138 4
はらはらと竹皮を脱ぐ自粛かな　山中　葛子　138 4
三越でケーキを買った広島忌　小林　実　139 5
海見たくなりぬ林檎を真っ二つ　塩野谷　仁　139 5
はらはらと竹皮を脱ぐ自粛かな　山中　葛子

コロナ禍により、これまではごく当たり前に行ってきた句会等がことごとく自粛となる昨今。筍の皮が音をたてて剥がれてゆくが如く、作者の大切な日常の一部が有無を言わせず剥がされていく強い喪失感。コロナ禍の日常を詠った数多の句の中で、その心髄を穿った一句。

東　國人

芒原よーしやる気になってやる　三須　民惠　136 7
剥いでも剥いでも白菜のストイック　長濵　聰子　136 9
スクラムが崩れて春へ手を伸ばす　普川　洋　136 10
宇宙まで行つて来た声初電話　鈴木　岑夫　136 15
自閉症とふ子の手の熱し初燕　松岡　節子　137 8
耕して耕して父土となる　若林　佐嗣　137 9
千歳飴握りこれより一代記　上杉　良身　138 6
虫籠の出口へ張り付いてゐたる　小泉瀬衣子　139 5
どんぐりころころ君はもう青年　里見　さち　139 5
骨太を褒められ壷に入る晩秋　越野　雄治　139 7
千歳飴握りこれより一代記　上杉　良身

「千歳飴」を持つ幼子。七五三の祝いを両親にされ喜んでいる姿が目に浮かぶ。作者は今ここから、この幼子の人生が始まり、長く続いていくことを「一代記」という言葉で締めくくった。下五のこの一語の発見によって、この句はより趣き深いものとなった。

長濵　聰子

大正の女将は聲で霧払う　並木　邑人　136 8
蒼白き骨片風の冬かもめ　細根　栞　136 9
陽炎をすくってみたら父と母　馬渕　津枝　136 10
海鳴りの黒き残像沖縄忌　前田　孝子　137 9
秋つれて名水巡る城の町　大地　節子　137 10
いくたびも夏が過ぎ東京に川　渡辺　澄　137 10
たらちねや寂しさの数着重ねて　橋口　久子　137 11
瞬きをふっと追い越す冬の蝶　森須　蘭　138 4
梅を干し己が仕舞い方を忘る　加藤　法子　138 6
まくなぎを抜けていよいよ真人間　越野　雄治　139 7

小多田文子

冬木みな祈りのかたち人許す　永井アイ子　136 10
人日や影にもありぬ裏表　徳吉洋二郎　136 10
触れるまで葉っぱで居たり青蛙　大澤ひろみ　136 15
うららかや波音のせぬ水平線　山田　邦彦　137 10
投合の愛の研や山笑う　石井紀美子　138 4
目礼や言葉ひらひら夏の蝶　上野　紫泉　138 5
転んでもこの道をゆく花吹雪　小野　功　138 6
月見草いまも砲台跡と呼ぶ　加藤　法子　138 6
宇宙への無限の旅や天道虫　重田　忠雄　139 6
コロナ禍や夜目に新樹の匂ひけり　近藤　幸子　139 6

戸邉　光一

つばめ来てすべての鍵を開け放す　山中とみ子　137 10
待針は待つことばかり忘れ花　倉岡　けい　137 11
神かけて孤独死ではない梅一輪　横須賀洋子　138 4
ちぢむ肉体マスクの掛かりにくい耳　山中　葛子　138 4
風呂敷の包む好日桜東風　関谷ひろ子　138 5
まだ鶏になれず夕陽の葉鶏頭　岡田　淑子　138 7

蜻蛉消え青空のまた深くなる　塩野谷　仁　1395
晩年は各駅停車秋夕焼　小張　直子　1396
護身とは動かざること蟇　椎名　鳳人　1397
骨太を褒められ壷に入る晩秋　越野　雄治　1397
護身とは動かざること蟇　椎名　鳳人

コロナウイルス菌なる悪性の病いが流行して緊急事態になり、不要不急の外出はしない事と言われ、人々が皆家に閉じ込もり耐えた約二週間は特につらい日々であった。蟇を擬人化して現代社会を見事に言い得ている。「動かざること」も言い得て妙、蟇の無気味な姿が一層不安感を強くしている。

椎名　鳳人

大寒波焜ぎの水の声上げる　実籾　繁　1367
無言と言う圧力あるや月白し　戸邉　光一　1367
寝に堕ちる幽(かそけ)きあわい雪の声　長井　寛　13611
つばめ来てすべての鍵を開け放す　山中とみ子　13710
咳するも気がねの世なり放哉忌　秋山　勝男　13711
はらはらと竹皮を脱ぐ自粛かな　山中　葛子　1384
まだ鶏になれず夕陽の葉鶏頭　岡田　淑子　1387
月下美人煩悩鎮めつつひらく　小張　直子　1396
白つばき照る静けさの浄土かな　下村　洋子　1397
北へ向く熱き腸鳥帰る　木之下みゆき　1397
大寒波焜ぎの水の声上げる　実籾　繁

今年の寒波は、新型コロナ第三波の急激な感染拡大と同時にやって来た。国をあげての対策も一向に効果を上げず、ふるえあがる毎日である。一方、焜ぎの水は刃物職人（昔は刀鍛冶）が鉄を鍛える時、赤熱したあと急冷に用いる水であるが、急冷のときに水は鬨の声を上げる。まるでコロナ感染に震え上がる私たちの日常の心境を物語っているようだ。早くコロナも寒波も治まって、暖かい春を迎えられることを切に願うのみである。

多胡たかし

無言館の未完裸婦像蟬の声　村田黙己春　1367
ふるさとは風の国なり干大根　中澤　敬子　1369
老老の静かな看取り龍の玉　保坂　末子　1369
走馬灯あとに生まれて先に逝き　中山　皓雪　13611
終戦忌語りべとなる夫は遺児　山中　賴子　13711
畔焼いて棚田の輪郭浮き上がる　坂本千惠子　1384
いっぽんの釘に影ある春の昼　門谷　杜人　1384
無人駅みんな見守るつばめの子　北野　耕太　1387
蜻蛉消え青空のまた深くなる　塩野谷　仁　1395
葬ること叶わず夕立地を叩く　椎名　鳳人　1397
無言館の未完裸婦像蟬の声　村田黙己春

無言館は上田市郊外に信濃デッサン館（現在の残照館）の分館として窪島誠一郎氏が画家野見山暁治氏の協力を得て全国の戦没画学生の遺作を蒐集し平成九年に開館した、僧院を思わせる外観はまさに相応しい佇まいである。

若き画学生が出征のその瞬間まであと十分あと五分と絵筆を走らせ、モデルの恋人に生きて帰ったら必ず続きを描くからと言い残して戦地に発ったという。翳りそめる木立の蟬の声が胸に沁みる。

加藤　法子

おもしろい老婆になろう猿酒　林　ゆみ　1368
堪忍袋から出るわ出るわ女正月　長濵　聰子　1369
黄昏の幕カーテンコールの敬老日　細野　一敏　13611
点描の小雨にけぶる冬もみじ　長井　寛　13611
芽吹きとはしやんと立つこと風の声　相原　一枝　13710
黙と云う労りのあり夕桜　森　孝子　13710
雛まつり子供が帰ったあとからは　横須賀洋子　1384
はらはらと竹皮を脱ぐ自粛かな　山中　葛子　1384
まくなぎを抜けていよいよ真人間　越野　雄治　1397
蜘蛛の囲を破るのは夜風の骸　木之下みゆき　1397

山崎　公子

ダンプカー海へ連なる走り梅雨　小泉瀬衣子　1395
半歩でも踏み出して見る草の花　岡崎　翠　1395
行く春や明日解体の店眠る　岡田芙美子　1395
だしぬけに夜のみんみん本気なり　小川トシ子　1395
倦怠や沼をみにきて馬をみる　尾形ゆきお　1395
胸躍る全き夕焼知らせ合ふ　佐藤　浩子　1395
どんぐりころころ君はもう青年　里見　さち　1395
来し方に筋書は無し根深汁　小張　直子　1396
夕焼へ合掌・人を人怖れ　椎名　鳳人　1397
休校で潮目が変わる金盞花　木之下みゆき　1397
来し方に筋書は無し根深汁　小張　直子

二〇二〇は世界中コロナ。まして、ヨーロッパは変種のコロナ。コンピュータ革命で生活の一部が、家から出ずに買い物ができて、遠い所に行かずに今が見えたり。しかし、目に見えないウイルスが、命を奪う大惨事が起っている。マスク、手洗い、うがい消毒と、生活スタイルを注意深いものにしなければならない現実を、まさに筋書は無し根深汁である。

これから産声をあげる子らがウイルスに勝つ因子をもって生まれてくるのだろう。続く人類の為。

■研究句会のご案内

当協会では、俳句の向上と交流を図るため現在、左記の研究句会を開催しております。
会員・会友どなたでも参加できます。コロナ禍の現在は通信句会が主ですが、新規参加者の方（非会員の方も）大歓迎です。
是非お誘い頂き、ご一緒に俳句を楽しみましょう。

■津田沼研究句会
場　所　津田沼一丁目町会会館
時　間　毎月第二火曜日13時～16時
作　品　二句事前投句
連絡先　徳吉洋二郎
（℡０４３-２７７-６１６５）

■青葉研究句会
場　所　千葉市民会館
時　間　毎月第四木曜日13時30分～16時30分
作　品　三句事前投句
連絡先　矢野　忠男
（℡０４３-２５１-４３８１）

■柏研究句会
場　所　柏市「ハックルベリー書店」二階
時　間　毎月第二土曜日13時～
作　品　五句持ち寄り
連絡先　髙橋　宗史
（℡０４-７１２５-３３８２）

■君津研究句会
場　所　君津市生涯学習交流センター
時　間　毎月第一木曜日13時30分～16時20分
作　品　三句事前投句
連絡先　石井紀美子
（℡０４３９-５２-６２５４）

❑❑津田沼研究句会報告❑❑

（於：津田沼一丁目町会会館）

●第三三八回（令和二年十一月十日）
司会　池田　博臣

銀杏を踏むか踏まぬか一本道　股野　久子
たこ焼の蛸噛み切れぬ文化の日　横須賀洋子
母からの着信七回神無月　伊与田すみ
ロボットの複雑骨折文化の日　徳吉洋二郎
海鳴をいつも遠くに新松子　星野　一惠
背を丸めそぞろ寒さを楽しめり　なかもと淑子
高空や富士借景に帰り花　竹田　彩子
水引やときに泉下の揺らぎあり　池田　博臣
かりがねや静かに闇の迫り来る　村上　澄子
漲る四肢駆ける宙々騎手よ秋　栗原　正子
コスモスの横に繋がる水平線　増田　豊子
靴の白砂払うて熱き朝霧へ　高木　一惠
濡れるとは同期すること雁の列　並木　邑人

●第三三九回（令和二年十二月八日）
司会　高木　一惠

人間を除けて寂しや嚏する　伊与田すみ
テリトリーは駅前までよ帰り花　股野　久子
石蕗の黄に見失う詩の獲物かな　並木　邑人
十二月八日メガネを買い替える　徳吉洋二郎
木枯しや不要不急の急ぎ足　村上　澄子
ガバリと目覚めモノクロの冬の海　池田　博臣
存えて閉口頓首柿すする　横須賀洋子
柳葉魚食い一杯やった夢見よう　吉野　精
冬銀河両手で包むホットワイン　竹田　彩子
地の神を鎮めて銀杏落葉かな　星野　一惠
銀杏散り天辺に鵙呼び戻す　高木　一惠
十二月ビーバームーンよく見ゆる　増田　豊子
片仮名語湯水のごとく湧く立冬　なかもと淑子
冬霧や高層群浮遊行ってらっしゃい　栗原　正子

●第三四〇回（令和三年一月十二日）
通信句会　担当　徳吉洋二郎

これやこの自粛のかたち寒卵　横須賀洋子
煮凝りや不安つるりと腑に流す　竹田　彩子
渋滞の先の故郷初明かり　星野　一惠
初笑い赤子は神にあやされて　なかもと淑子
紅絹一反庭ひろげたり寒椿　栗原　正子
初夢のさめて何だか若くなる　増田　豊子
新橋の屋台も小さき歯朶飾る　並木　邑人
帰る道教えてください早や四日　伊与田すみ
冬の午後カフェのテーマは病かも　股野　久子
あらたまの畑の白菜たすきがけ　高木　一惠
去年今年棒に節目のなき家居　村上　澄子
豆餅の豆半分の地球かな　池田　博臣
赤べこや餅を詰まらせべそをかく　徳吉洋二郎

❑❑青葉研究句会報告❑❑

（於：千葉市民会館・第六会議室）

●第一一〇回（令和二年十月二十二日）
司会　小林　実

蓮の実の飛んだところが自由律　細根　栞
濡るるともこのひとときのこぼれ萩　栗原　正子
暗夜行路狐火見た人見ない人　加藤　法子
ふるさとは月光に濡れ波に濡れ　山﨑　幸子
濡れ髪のうなじ爽けし応為の図　矢野　忠男
蛇穴に入るくつしたは踵見え　森井美惠子
遠き濡文月光のさざなみは　石井紀美子

何が何んでも平均台が秋である　小林　実
修那羅峠の霧にずぶ濡れ猫神よ　鈴木まんぼう
濡れ衣を着る涼しさよブーケトス　並木　邑人
濡れ縁の尼僧の翳りや十三夜　細野　一敏
禁断の天の岩戸やボジョレヌーボ　徳吉洋二郎
秋の灯影に呼び出されあいびき　池田　博臣
約束のきょうずぶ濡れの秋蛍　長井　寛
揺れ易き八十路の天地今朝の冬　長濵　聰子
コスモス群オーケストラに揺れていて　加賀谷秀男
自転公転零れそめたる金木犀　越野　雄治

●第一一一回（令和二年十一月二十六日）
司会　長井　寛

煮詰まつて水差してゐる十二月　越野　雄治
煮こごりや宇宙いよいよゴミだらけ　小林　実
雪おんな感電人に手が触れて　長濵　聰子
まだ出さぬ手紙が一つ冬薔薇　森井美恵子
手繰り寄す山の深さや烏瓜　石井紀美子
花八つ手衣食足る世に戦あり　鈴木まんぼう
青き狼まなかいの大宇宙　池田　博臣
夜の桃両手に包む火照りかな　徳吉洋二郎
澄む秋の真中見つむる弓手に矢　栗原　正子
大大根駄洒落ついでに本心を　三須　民惠
地球ごと深みに堕ちて冬に入る　長井　寛
自粛生活カトレアの手慰　細野　一敏
靴直しますとありポインセチア　加藤　法子
あかぎれの昭和は遠し父母遠し　細根　栞
初嵐そは神の手風琴なりき　並木　邑人
猫の手を痒きところへ日向ぼこ　山﨑　幸子
いぶされて燻炭いぶる最中なり　矢野　忠男
黄泉の国臘梅の道どこまでも　加賀谷秀男

●第一一二回（令和二年十二月二十八日）
通信句会　担当　矢野　忠男

大袈裟に街が告白する聖夜　石井紀美子
呑助の象徴として赤海鼠　徳吉洋二郎
冬紅葉スープは熱くパン甘し　吉野　精
沢山の説教聞いて蛇穴へ　加藤　法子
大過無きとは口ばかり冬鼎　山﨑　幸子
大男まつげの雪を払ひけり　越野　雄治
夕暮れはゆうまぐれの色大焚火　細根　栞
大願はアメヤ横丁マスクせず　森井美恵子
悴める重厚長大先進国　松崎あきら
血を噴くか残照ながき紅葉山　長濵　聰子
小春来て夢より大き旅ごころ　長井　寛
大喜利のテレビに年の宿響む　並木　邑人
大寒の詩吟の声の尖りけり　加賀谷秀男
大の字にりゅうぐう見上ぐ春待月　池田　博臣
大宇宙ハヤブサ健気渡りかな　栗原　正子
初荷積み五大力船登戸浦へ　鈴木まんぼう
大波小波自由満喫年送る　三須　民惠
寒波急大字小字村外れ　矢野　忠雄
蓑虫のぶらり揺れるも芸のうち　小林　実
空すこし横へ混じって枯野かな　たけなか華那
鮒鯽は尾鰭誇示人は筋骨誇示　細野　一敏

❑❑ 柏研究句会報告 ❑❑

（於：柏市「ハックルベリー書店」2階）

●第九十八回（令和二年十一月十四日）
司会　岡田　春人

地球ごと深みに堕ちて冬に入る　長井　寛
三日ほど流離の果てを衣被　下村　洋子
テノールの歌聴き揺れる秋桜　橋本志津子
小春日和縁側に足踏ミシン　岡田　春人
コロナ菌ＧＯＴＯキャンペーン脅かす　井上けい子
激昂のあとの沈黙水の秋　椎名　鳳人
蜜柑熟るるゆさゆさ垣を越えたがる　佐藤　鈴子
秋霖や眺めるだけの棚の本　髙橋　宗史
獺祭忌視点を変えてみて気づく　藤好　良
秋の虹起つとこしえの地平線　野口　京子

●第九十九回（令和二年十二月）
通信句会　担当　髙橋　宗史

湯豆腐や未だに学ぶことばかり　岡田　春人
山眠る開けてはならぬ玉手箱　川上　典子
白亜紀は私の起源雪降れり　木之下みゆき
存在は枯れて鮮やかメタセコイヤ　佐藤　鈴子
漢方薬に勝るお喋り返り花　椎名　鳳人
灯を入れて障子の内を私す　下村　洋子
山茶花散りぬ赤裸々な告白書　髙橋　宗史
ククックックッと毛布の中の笑ひ声　中里　結
雪になる真白き声を聴いており　長井　寛
小六月術後のジャンボアイスがぶり　並木　邑人
冬ざれの非常事態で米余る　野口　京子
ボルネオの匂いかすかな室の花　橋本志津子
三角縁神獣鏡なる卑弥呼の祓ひ寒蜆　藤好　良

●第一〇〇回（令和三年一月）
通信句会　担当　髙橋　宗史

篝火の夜を染めゆく薪能　井上けい子
することのなくて三日の夕餉かな　岡田　春人
着ぶくれた女溢れて三面鏡　川上　典子
寒波急積ん読の本眠り落つ　木之下みゆき
公園にディスタンスの輪第九かな　佐藤　鈴子
歌がるた詠むひらがなに和の匂い　椎名　鳳人

玄冬の底に墜ちゆく銀の匙　下村　洋子
生まれんと生まれしならず福寿草　髙橋　宗史
星もまた旅してゐたり大冬木　中里　結
定家ゆくうぐいす張りの霜柱　長井　寛
文字以前に小舟流離う雪煙　並木　邑人
列島の強風の中にんじんラペ　橋本志津子
百年の過客のデザート蜜柑Ｓ　藤好　良

❑❑ 君津研究句会報告 ❑❑

（於：君津市生涯学習交流センター）

●第八回（令和二年十一月五日）
司会　長濵　聰子

背信の身の暗がりに狐火来　加藤　法子
狐火に逢ったら明日がこわれそう　石井紀美子
磯波の砕けて散って大銀河　山田たかし
狐火に呼び止められしまま不明　泉　志眞子
狐火の残像少年愛に触れ　馬渕　津枝
狐火を追えば遠野の婆に遇う　前田　孝子
今朝の庭一カラットの露万朶　森　孝子
狐火となりても吾妹しのび来よ　並木　邑人
狐火燃え尽きて平家物語　徳吉洋二郎
バスの列赤いマフラーぴょんと跳ね　小澤　富子
狐火がわたしに飛火したらしく　長濵　聰子
きつね火か母の迎え火不知火海　古賀　壽昭
狐火を嗤ふ瞳に狐をり　越野　雄治
尾骶骨割れたか狐火燃えたか　細野　一敏
整えば去りし子の部屋秋のさぶ　羽矢　眞人
下校児の挨拶マスクに籠りきり　金澤　惠子
良き名持つ水引の坂続きをり　鈴木　美幸
着ぶくれて深海魚めき家籠る　田沼美智子
高齢の日々の生業秋思ふと　村田　満枝

●第九回（令和二年十二月三日）
司会　細野　一敏

胸底に止どめし一語煮凝れる　加藤　法子
煮凝の溶けて本音の出る誤算　前田　孝子
美しき火照りの骨拾い来て煮凝る　長濵　聰子
煮凝の目ん玉掬う戦中派　泉　志眞子
草紅葉左右に動く山羊の口　村田　満枝
煮凝りや酒敵の距離の摩訶不思議　石井紀美子
枯葉舞う風に刃のある如く　羽矢　眞人
煮凝となる恋のあり火焔土器　並木　邑人
煮凝りの遠き日々より溶け出ずる　鈴木　美幸
謀反の匂いするしし鍋ぐつぐつ　山田たかし
荒ぶる魂ラグビーボール楕円　細野　一敏
煮凝や捨てたる家の懐かしき　小澤　富子
煮凝や内容のこき席題句　田村美智子
煮凝や夜明けは海を遠くする　馬渕　津枝
小春日のボタン一つのかけ違い　森　孝子
亭主鍋褒めて重宝煮凝　古賀　壽昭
煮凝や取り壊されし母の家　越野　雄治
煮凝り溶けて日常の戻りくる　徳吉洋二郎
煮凝りのぷりんぷりんや朝の飯　金澤　惠子

●第十回（令和三年一月七日）
司会　長濵　聰子

ゲルニカの牛の涙や竜の玉　徳吉洋二郎
桃色に張る牛の乳春立てり　泉　志眞子
売られゆく牛のひと鳴き霜の朝　前田　孝子
春兆す仔牛の角が貌をだす　山田たかし
高気圧雲食い尽す冬日かな　羽矢　眞人
鷹匠の今放ちたり鋭き目　小澤　富子
春立ちて牛の一声間のびせり　森　孝子
きっぱりと裸木広げ冬香る　鈴木　美幸
干支は丑尻に敷かれて初詣　細野　一敏
冬うらら陽を吸う牛のあぐら鼻　石井紀美子
牛しゃべる初松籟のそよぐ度　並木　邑人
薄味の牛歩の余生若菜摘む　長濵　聰子
冬ざれの野の一隅にザイル干す　加藤　法子
日本の曖昧な仕切り花八手　馬渕　津枝
牛刀のなじむ俎始めかな　田沼美智子
冬銀河宇宙へ開く未来地図　村田　満枝
金婚や余生牛歩の初茜　古賀　壽昭
ダムに給水牛に飲ませて年送る　金澤　惠子
牛蒡食ひ原罪遠きクリスマス　越野　雄治

《会員・会友の近況》②

・金子兜太の追悼句の中では、「現代俳句」黒田杏子と岩波書店のＰＲ誌「図書」の田中亜美が印象に残った。（高橋　節夫）

・千葉の俳人の方たちと交流を持ちたいと思っていましたが、まさかのコロナ騒動。今は所属結社のインターネットで細々と俳句を続けております。（鈴木　房州）

・会報を拝読し勉強しておりましたが、今回初めて参加投句致しました。（中西布美子）

・自粛生活、作品整理などをしています。コロナ太りも困ったことです。（野口　京子）

・十一都府県に緊急事態宣言が発令。東京五輪・パラリンピックの開催は厳しいか。各自は宣言項目を守っていると思うが、私もウォーキングやストレッチに家庭菜園と極力体を動かし、電車に乗る時は座らずバランス感覚と足腰を鍛えている。（田端　重彦）

ひろば

■市原市秋季俳句大会

例年市原市文化祭として実施してきた大会だが、令和二年はコロナ禍により俳句協会単独での開催とした。また席題句会、小中高生による文芸コンクールも中止し、兼題（渡り鳥・本・雑詠三句一組）投句のみの大会とした。なお主選者を髙橋健文副会長にお願いし、県内外から四五九句の応募があった。

（並木邑人記）

市原市長賞
渋々がいつか本気の栗ひろひ　鈴木　喬二

市原市俳句協会賞
秋水へ棹一本の渡し舟　丸　喜久枝

議長賞
能登塩を入れ妣に炊くむかご飯　山田香津子

教育長賞
灯台も我も読点わたり鳥　長濵　聰子

髙橋健文特選
蕉門の裔と名告りぬ木樵虫　木村　傘休
何時からか兎の居なくなった月　大澤ひろみ

木村傘休会長特選
鳥渡る島のマリアは浦を向き　松本　正子
本塁に遠き青春牛蒡引く　並木　邑人

掲示板

《会員・会友異動》

●逝去（会員）林　哲

●退会（会員）中村　棹舟

●新会員
鈴木　義久（会員）
田村　隆雄（会員）秋尾　敏紹介
松村　五月（会員）山崎　聰紹介
林　ゆか（会員）大塚阿澄紹介

《令和二年度第四回幹事会》

日　時　令和二年十一月二十四日（火）
午後一時～三時

場　所　船橋市勤労市民センター

議　題
一、令和三年度総会・俳句大会について
　―コロナ対策案の検討
二、予算編成・管理及び会計処理の変更について及びこれに伴う令和三年度の予算編成について
三、秋の吟行会報告（稲毛海浜公園）反省点と収支報告
四、第一三九号会報について
五、現代俳句協会（本部）の動向について
六、各研究会の状況について
七、その他
　会員・会友の入退会状況ほか

※なお、一月二十六日（火）に予定していた幹事会は、新型コロナ感染拡大予防自粛期間中のため中止となりました。

お知らせ《春の吟行会》

吟行会の案内チラシを今号に同封出来なかったことを先ずお詫び致します。

二月十日現在もなお「緊急事態」下にあり、この間、会の予定を立てられずにいましたが、検討の結果、六月二日（水）に船橋界隈を吟行地とする予定を組みました。会場は未だ決定に至っていないこと、ご理解ください。

尚ご案内のチラシ・資料等は四月中旬に会員・会友の皆様に郵送致します。

昨秋の会の経験も生かし、コロナ禍での原則的な態勢を取りながら楽しく充実した会にする所存です。

❑❑事務局・編集部だより❑❑

●コロナ禍で世の中が一変し、大きな爪痕を残したこの一年でした。漸くワクチンの接種が始まり、少しほっとするこの頃です。

●皆様方からは「私の感銘句」や「諸家近詠」ご近況など力強いご投稿を頂き、心より感謝致します。各研究句会のご案内や、春の吟行会予告も掲載致しました。もうすぐ春本番。皆様と句会を楽しめる日が待ち遠しいですね。

現代俳句千葉　第一四〇号
令和三年三月一日発行

発行人　千葉県現代俳句協会
会長　並木　邑人

現代俳句千葉編集部
〒278-0037 野田市野田
六七七-一-A二一五
木之下みゆき

千葉県現代俳句協会事務局
〒263-0043 千葉市稲毛区小仲台
七-八-二八-八一〇
羽村美和子
TEL・FAX 〇四三―二五六―六五八四